

加茂谷中学校人権通信

きずな

12月号

2024年12月20日(金)発行

加中人権スローガン

「気づき・考え・行動する」

めざす学校像

「希望と笑顔があふれる楽しい学校」

12月14日(土)に、人権参観授業を行いました。「親子人権学習」として、親子で「楽しかったな。」「家でも人権の話、してみよか。」と思ってもらえるように、人権かるたワークショップと人権かるた大会を実施しました。最後に人権行動宣言をして、加茂谷中学校全員でお互いを大切にしていこう、と考えるよい機会となりました。

1年生

私は親子人権学習を行って、親子で話し合うことって大切だな、と感じました。私自身、人権かるたの好きな札を言い合うとき、自分の親は、こういうことを考えていて、こういうことが大切だと思っているんだ、と改めて感じました。また、学習人権部の発表では、1年生は支援学校に行ったこと、2年生は修学旅行で行った沖縄の平和祈念館のことなど、いろいろな人や物や歴史、文化に触れることも大切だな、と思いました。これからもたくさん人権のことについて学習して、知っていきたいです。



2年生

今日は私たち生徒だけでなく、親子で交流したので新鮮に感じました。好きな人権かるたを発表するときは、生徒目線だけでなく、親目線でも意見を聞くことができ、人権課題は全員で取り組むべきものだと思います。かるた取り大会では、かるた取りという遊びと同時に人権課題を知ることができてよいと思いました。あまり家族と人権について話すことがありませんでしたが、この授業参観を通して親と話し合ういい機会だと思いました。これからは学校だけでなく、家でも話し合ってみたいです。

3年生

今日の親子人権学習で人権問題について親子同士でしっかり話し合うことの大切さを知ることができました。まず、各学年の人権問題に対する感想を聞いた後、自分が心に一番残った人権かるたの札を選びました。少し前にやったことはありましたが、再びこうして好きな札を選ぼうとすると、人権の重要性がしっかり分かるようになってきました。そして、親子での人権かるた取りを行うのは初めての経験でした。やっていると、どこの班もすぐ楽しそうに行っていて、うれしい気持ちになりました。このように親子で真剣に人権学習に取り組むことができてよかったです。帰って家の人と人権問題の解決法について考えることもできてよかったです。



全国中学生人権作文コンテスト徳島県大会で、1年生の北内新良太さんの人権作文「『自分らしく生きる』ということ」が奨励賞となりました。みんなでできることから一歩ずつ始めていきましょう。

僕は、小学三年生の時、岡部さんの講演を聞きました。岡部さんは、元車いすテニス日本代表選手で、車いすテニスがとても上手な方でした。僕たちにも車いす体験や車いすテニスのしかたを教えてくださいました。車いすを使っただけのテニスは、車いすの操縦が難しかったです。その後、岡部さんの講演を聴いて終わりました。

そのときの僕は、まだ小さかったので、講演の内容がよく分からず、「障がい者は、何もできない。」と覚えてしまいました。だから、僕たちが障がい者を助けてあげないといけないのだと思っていました。そうしたら、きっと障がい者も喜んでくれると思いました。このように、「障がい者は、サポートされる人」「障がいがない僕たちはサポートする人」という一方通行の考え方をしていました。

しかし、中学校一年生になってから、もう一度岡部さんの話を聞く機会があり、考え方がガラッと変わりました。

小学生の時と、やったことは同じです。まず最初に車いすテニスを体験させていただきました。そのときの僕は、「やっぱり障がい者はふべんだなあ。」と感じました。だから、「やっぱり僕たちがサポートしなきゃいけないんだ。」と覚えてしまいました。

しかし、講演が始まった途端、今までの自分の考え方が変わっていきました。中学一年生になって、小学三年生の時はよく分からなかった岡部さんが伝えたい話が理解できるようになったからだと思います。

足が動かない岡部さんですが、普段の生活の中で一人でできることは、たくさんあります。入浴、料理、買い物、車の運転。逆に、できないことがないくらいです。

また、岡部さんは現役選手の時には一人で八役こなしていたそうです。そんな大変な中で「自分らしく生きるために、ありのままの自分でいられる場所が見つかった。」という言葉にはっとさせられました。「障がいを持った人はかわいそう。車いすの人は、何もなくてもいい。」そんな周りの見方が、岡部さんを生きづらくしていたと思ったからです。

それでは、僕たちは障がいを持った人と、どういう風に接したらよいのでしょうか。岡部さんは、自分を障がい者の人間と見ずに、一人の人間としてみてほしい、とっていました。例えば海外遠征に行ったとき欧米でかけられた、

「駅はどちらですか？写真を撮っていませんか。」

などの信頼されている、と感じる対応や

「どうしたい？どうしてほしい？自分でできそうね。」

などの尊重されている、と感じる言葉が嬉しい、と聞いたときは、自分がどうしたらよいかというヒントをもらいました。

僕は、この話を聞いて、自分の見方を考え直しました。岡部さんが「自分から変わらなくては」と思ったように、僕も差別をなくすために、「誰かが差別するのをやめたらいい」と思うのではなく、自分が変わらなくてはならないと思いました。まずは、自分が差別や偏見をなくそうとしなければ、差別や偏見はなくなりません。これからは、障がいがあってもなくても同じ「人」として尊重し、信頼する関係を築いていきたいです。そして、もし自分がサポートする場面に出会ったら、相手も自分も「楽しい」と感じられるような声かけやサポートをしていきたいと思います。